

優秀賞

人と水の関わり

人と水との関わりは、僕たちが想像する以上に深く、そして密接だ。その例として、まずは僕の記憶に刻まれている一つの光景を挙げたい。それは、ラグビーの合宿で訪れた長野の山奥での経験だ。厳しい練習の合間に、冷え切った蛇口から溢れ出る水を口にしたとき、その驚くほど澄んだ冷たさと、微かな甘みに衝撃を受けた。渴いた身体に染み渡るあの感覚は、単なる喉の渇きを潤す以上の、生命の根源に触れるような瑞々しい記憶として今も鮮明に残っている。しかし、この「至福の一杯」という当たり前の恩恵が、今、環境破壊や気候変動という、静かな脅威によって危機に瀕している。

小学四年生のとき、僕は社会科見学で「宮ヶ瀬ダム」を訪れた。そのダムの、巨大な堤体の前に立ったとき、僕はその存在感に息を呑んだ。ダムは単なる貯水槽ではない。下流に住む人々の命を水害から守り、生活を照らす電気を作り出し、社会の営みを支え続ける。いわば、僕たちの暮らしを維持するための「社会の心臓」としての機能を果たしていたのだ。

その次の社会科見学で訪れた「神奈川水再生センター」では、役目を終えた水が再び自然へと還っていくための緻密な工程を目の当たりにした。異臭を放つ濁った水が、高度な技術と多くの人々の工夫によって清流へと磨き上げられていく様は、まさに驚異的であった。また、休日には母と妹とお台場にある「東京都虹の下水道館」にも足を運んだ。ここでは下水道の仕組みを、ドラマを通して学んだり、水道局で働く人の仕事の一端を体験したりした。

これらの施設で共通して痛感したのは、蛇口の向こう側には、想像を絶する巨大なインフラと、それを支える多くの人々の献身があるという現実だ。地球上に存在する水のうち、人類が利用可能な水はわずかパーセントに満たない。この限定的な資源を、僕たちはあたかも無限であ

るかのように思い込んで浪費してはいないだろうか。

僕は昨今の「令和の米騒動」とも呼ばれる事態で、水の「循環の断絶」に対する恐怖を、改めて認識した。記録的な少雨は大地を乾かせ、作物の実りを奪い、僕たちの食卓にまで影を落とした。この時、守るべきは直接的な飲み水だけではないことに気づいた。一粒の米、一株の野菜の背後には、必ず豊かな水の循環が存在している。僕たちは間接的に「水を食べている」と言っても過言ではないのだ。

ここで、僕が幼い頃から親しんできたドラえもんの一編、「水玉カプセルの旅」という話を思い出す。水の一生を秘密道具で追体験し、「水を守らなければならない」と心から決意するのび太の姿は、今の僕の心情と深く共鳴する。上流の山々が荒廃すれば、あの長野で感動した清冽な水も、ダムが蓄える豊かな水も失われてしまう。のび太が抱いた危機感は、空想の世界の話ではなく、僕たちが今まさに直面している喫緊の課題なのだ。この水を守るために僕たちにできることは、排水口に油を流さない、あるいは節水を心がけるといった、些細な行動かもしれない。しかし、今の僕たちが最も重んじるべきは、効率や利便性を追求するあまり失われつつある「適当よりちよつとの面倒をする精神」ではないだろうか。食器を洗う前に一度汚れを拭き取ること。シャワーを無意識に流しっぱなしにしないこと。その数秒の慎みと手間が、未来の地球へつながる一滴になると信じて、僕は今日から、自負を持って「ちよつとの面倒」を積み重ねていきたい。